

『黄素妙論』の書袋について

永塚 憲治

公益財団法人 研医会 研医会図書館

『黄素妙論』は、嘉靖十五（1536）年の刊記が記されているものと、丙寅仲冬（嘉靖四十五・1566年と推定される）の序文があるもの二種類ある明の房中書である『素女妙論』のうち、後半に春葉（強壯剤・催淫剤など性行為を助けるため薬の総称）の処方載せる前者を曲直瀬道三が和文に抄訳したものと考えられている。

長澤規矩也の調査（『図書学参考図録』第二輯 汲古書院 1976）によれば、『黄素妙論』の版種、5種類を以下のように挙げている。1. 江戸初期刊本 大一冊 2. 江戸前期京都長嶋与三覆刻本 大一冊 3. 江戸前期刊本 大一冊 4. 江戸末期刊本 中一冊 5. 江戸末期敏求館覆刻本 小一冊。

そもそも『図書学参考図録』に於いて、『黄素妙論』は、「別々に見ると同板と誤る異版本」の例の書物として挙げられており、見誤りやすい大本の1・2・3のグループと中本の4・小本の5のグループに分けて弁別の仕方を説明している。今回紹介する書袋は、江戸末期敏求館覆刻本の書袋であるので、行論の必要上、後者のグループの弁別についてのみ引用するが、長澤は「第二十三葉の第二行の「行」字に送仮名がない」ものを江戸末期敏求館覆刻本としている。これに従えば、「行」字に送仮名がある京都大学附属図書館に所蔵されているものが江戸末期刊本となり、「行」字に送仮名がない公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋（研3675）、公益財団法人研医会研医会図書館に所蔵されているものが、江戸末期敏求館覆刻本となる。今、江戸末期敏求館覆刻本をみるに、刊年は勿論のこと版元名もないのである。では、「敏求館」という版元名はどこから判明したものであろうか。それは今回入手した「書袋」に記されてあるのである。「書袋」、単に「袋」と呼ばれる場合もあるが、先ず「書袋」とは何かを説明しておこう。中野三敏の『書誌学談義 江戸の板本』（岩波書店 2010年）は、「書袋」の説明を以下のように言う。「「袋」とは書物の出版に当たって、本屋がわざわざ本の保護のために作製する紙製の上包みを言うので、近代の本のカヴァーに当るもの、但し近代刊行本のカヴァーは一枚の紙を表紙の上にあてて左右を中へ折り込む形式の物がほとんどだが、江戸期板本の袋は一枚の紙を袋状に貼り合わせて、天地を開け、中に書物を入れて、表面に書名や著者名・版元名などを刷りつけたものを言う。天地が開いているので厳密な意味での袋ではないが、ともかく書物を包み込んで保護する役目なので「袋」といいならわしている。」とある。

さてこの「書袋」であるが、その性質上捨てられて現存していない場合も多いが、書誌学的には、本の先に述べたように書名や著者名・版元名など重要な要素が記されており、それらが書物本体の方には記されず、「書袋」だけに記されている場合もある。江戸末期敏求館覆刻本の「書袋」は、四周単辺で右から「道三先生著作／くはう そ 三やう ろん／黄素妙論 完／敏求館重彫／」と刻されており、江戸末期敏求館覆刻本も先に述べた「書袋」のみに版元名が記載されている例にあたる。長澤は、紙面の都合などで書肆名が「書袋」に依ることを記さなかったが、長澤が見たものは恐らく「書袋」を備えたものだったのではないかと思われる。それは、書物本体にない敏求館をはっきりと記載していることから分かる。また書物本体の方に敏求館の記載があれば、それが4の江戸末期刊本との弁別につながるので、それが無いが故に本文の送仮名の有無で弁別できるとしたことからも推察できる。ただ「書袋」が弁別の根拠となると、ただでも「書袋」は紛失して現存することが少ないので、「書袋」がない場合、弁別に困ることとなる。故に弁別の根拠を本文の異同に求めたと思われる。